

インサーン (INSAN Iraqi Society) ワークショップ報告書

ラパリン地区における子どもたち対象のソーシャルアートアクティビティを通じた平和づくり
(Promoting peace building in Rapareen through social art activities with children)

プロジェクト地：イラク共和国キルクーク県ラパリン地区

期間：2009年12月-2010年2月

I. プロジェクト紹介

INSAN Iraqi Society (以下、インサーン (アラビア語で「人間」という意味)) は、キルクークのラパリン地区にて 2008 年 9 月より積極的に活動をしている。ラパリンは、様々な民族が混住する地域であり、民族グループ間での緊張が顕著である。民族間の平和構築を促し、平和的共存を確実にするために、インサーンは参加型の開発アプローチを展開してきた。このアプローチは、異なる民族の代表者や一般の人が多様なアクティビティを通して交流する機会を設け、関係や絆、共に未来を切り拓くためのビジョンの醸成を促進させている。

JVC のサポートを得てインサーンは、2009 年 12 月に 8 歳から 12 歳の子どもたち 40 人を対象にアクティビティを立ち上げた。キルクークの民族の代表に選ばれた子どもたちは、8 週間にわたり週 2 回集まり、平和と寛容をテーマにした工作などのアート活動 (アートを通じたアクティビティ) を行った。計 16 回にわたるセッションを通し、異なる背景を持った子どもたちの間に友情が築かれると共に、参加した子どもたちに平和や寛容、人権の概念を伝えることができた。

子どもたちと活動するファシリテーター 2 人がセッションを取りまとめ、インサーンのボランティアたちが各セッションに参加し、子どもたちの世話をサポートした。子どもたちの様子を見に来る親やラパリンのコミュニティ代表者もいた。

一連のセッションを終えた後は、子どもたちの家族に出席してもらい、子どもたちのアート作品を展示しての修了式を行い、彼らの成果を祝った。

II. 実施経過

1. 参加者の選定

インサーンのアートアクティビティへの参加者は、ラパリンにある 4 つの学校から募集した。各学校の校長先生とのミーティングで、プロジェクトのアクティビティを説明し、参加者のプロフィール情報を頂いた。校長先生たちは、奮って生徒の選定を行い、保護者の許可を得て希望者を参加させた。校長先生たちは、様々なクラス、異なる背景の子どもたちをリストアップし、そ

の名簿をインサーンへ提供した。男女比率や出身地のバランスを考慮した上で、インサーンは、そこから更に候補者を絞りこんだ。

子どもたちの選定は、下記の通り行われた：

- 女子 23 人
- 男子 17 人
- クルド人 14 人
- アラブ人 13 人
- トルクメン人 11 人
- アッシリア人 2 人

(参加者リスト)

2. ロジスティクス

アートアクティビティを進めるため、プロの絵描きであるファシリテーターが、インサーンに採用された。地元の学校で子どもたちと関わる経験を持つ女性も、アートアクティビティを統括するファシリテーターの補助役として採用された。

アクティビティ全体は、サラ・アサッド氏が監修した。彼は、インサーンのプロジェクトマネージャーでもあり、平和構築や人権について教えた経験を持つ。彼はファシリテーターに、アクティビティの種類や実行について様々な指示をする仕事を担った。

インサーンのボランティアも招集され、アクティビティの実施、および子どもたちの監督をサポートした。合計約 15 人のボランティアが交代でセッションをサポートし、各セッションには 4~5 人のボランティアが参加した。

お絵描きの材料は、ファシリテーターの要望を基に、インサーンの資材調達係により調達された（お絵描き帳、ペン、鉛筆、絵の具、紙類、粘土など）。

子どもたちのおやつとして、牛乳やその他飲み物、ケーキを提供した。

子どもたちの送迎は、インサーンがラパリンで推進している別の職業訓練プロジェクトで参加者の移動に用いられているバスを利用した。費用は職業訓練プロジェクトと分担し、アクティビティ開催地と子どもたちの自宅の間で子どもたちの送迎を行った。バスの定員が 20 人だったため、毎日バスは 2 回往復をした。

3. 手工芸アートセッションの実施 * manual art

ラパリンコミュニティセンターでは、合計 16 回のアートセッションを行った。セッションは、原則、週に 2 回金曜日と土曜日に行われ、祝日の際は、セッションの長さを適宜調整した。1 回のセッションは、平均して 2~2.5 時間行われた。

16回のセッションは下記のように行われた：

- 第1セッション（2010年1月31日）：アートアクティビティへの導入。子どもたちには、アクティビティとプロジェクトの目的について説明をし、お絵描きの基本を教えた。このセッションを通して、子どもたちはセンターの環境やスタッフ、お互いどうしに慣れることができた。
- 第2セッション（2010年2月1日）：キルクークに住む多様な民族について紹介した。このアクティビティでは、アラビア語で表記した「キルクーク」という単語を、伝統的な民族衣装を纏った4人の人が持ち上げている様子を絵に描いた。ファシリテーターは、キルクークを構成し、文化的に豊かにする4つの民族についてのディスカッションを展開した。子どもたち一人ひとりが自分の民族について紹介し、新しい友達と互いに理解を深めることができた。
- 第3セッション（2010年2月6日）：アイデンティティ・ポスター。子どもたち一人ひとりが、自分自身のアイデンティティ・ポスターを描くアクティビティを行った。自分の気持ちを表している顔と、自分の名前を描いた後、自分のアイデンティティ・ポスターについて発表し、自分の名前の由来や意味、描いた気持ちについて自分の言語で説明した。彼らは、戦争への恐怖や未来への希望を表現した。このアクティビティを通し、お互いのアイデンティティについて理解を深めることができ、言語の違いこそあれ、悩みや希望の点では似ていることに気付くことができた。
- 第4セッション（2010年2月7日）：ハンドツリー（手の木）のアクティビティ：子どもたち一人ひとりが、自分の手を紙になぞり、それぞれの手の絵を葉っぱとし、大きな木を完成させた。ファシリテーターは、「コミュニティ」の概念について説明し、一人ひとりが大切なコミュニティの一員であること、一人ひとりがコミュニティを豊かにし、美しくしていることを訴えた。このアクティビティを通し、子どもたちは協力の精神と、帰属意識について学んだ。
- 第5セッション（2010年2月12日）：飛行機のモデルを作る。子どもたちは、紙飛行機の作り方を学び、自ら作った紙飛行機に色を塗り、飛行機の使い途についてディスカッションした。子どもたちの大半は、飛行機が戦争に使われ、爆弾を投下することしか知らなかったが、戦争に苦しむ国へ人道支援を送るという用途についても話すことができた。その後、彼らの作った飛行機がよいことに使われることを願って、子どもたちは紙飛行機に平和に関する言葉を書いた。
- 第6セッション（2010年2月13日）：紙の装飾作り。子どもたちに、紙の飾りの作り方を紹介し、パーティ等での装飾にも使えることを説明した。また、子どもたちが準備を進めている誕生会やパーティについて話してもらった。各民族が大切にしている伝統行事や祝祭について説明し、お互いの伝統について理解を深め、知らなかったことをたくさん学ぶことができた。
- 第7セッション（2010年2月19日）：平和のランタン、「障害者」、コミュニティ・ダンサー。子どもたちに平和のランタンを描いてもらった。ファシリテーターは、イラク戦争と戦争の教育や医療への影響についてディスカッションを展開した。彼は、平和こそが、人と人のつながりを築き、国を復興させ、皆の明るい未来を実現させる一番の近道だと説明した。その後子どもたちは、「健常者」と「障害者」の絵を描き、戦争の悪影響について考える機会を持った。最後に、さまざまな民族の伝統的衣装を着たダンサーのグループが舞踊を披露し、和解のメッセージをダンスで訴えた。

-第 8 セッション (2010 年 2 月 20 日) : 平和の鳩と伝統的衣装。初めに、平和の象徴である鳩を描いた。次に、ファシリテーターは他の平和のシンボルを子どもたちから募り、オリーブの枝やピースサイン、V サインが挙げた。続いて、様々な民族の伝統的衣装を取り上げ、衣装細部の意味や由来について説明した。

-第 9 セッション (2010 年 2 月 26 日) : 凧作り。子どもたちは、木や紙を使って凧を作る方法を学んだ。一人ひとりが凧を作り、更に飾りにリボンもつけた。

-第 10 セッション (2010 年 2 月 27 日) : 凧作り。子どもたちは、凧作り作業を終え、鳩やその他の絵を凧の飾りにした。ファシリテーターは、凧を世界中の子どもたちにメッセージを送る手段にできると説明した。但し、治安上の問題のため、外に出て街の中で凧揚げをすることはできなかった。

-第 11 セッション (2010 年 3 月 12 日) : ジャパン・デー。子どもたちは、日本について学んだ。ファシリテーターは、地図上の日本の位置や首都、国旗、主要な慣習など、日本についての基本的な事柄を説明し、子どもたちは日本の国旗を描いた。

-第 12 セッション (2010 年 3 月 13 日) : ジャパン・デー。子どもたちは、アラビア語やアラビア文字とは大きく異なる日本語について学んだ。「こんにちは」「ありがとう」「さようなら」等、簡単な表現を学び、ひらがなやカタカナで自分の名前を書く練習をした。子どもたちは、知らなかった言葉を、はしゃぎながら楽しく学ぶことができた。

-第 13 セッション (2010 年 3 月 19 日) : アルミニウム板でつくる鳥。アルミニウム板という、子どもたちには新しい材料を使った。板の片側を棒で押し込み、レリーフが浮き彫りとなり、鳩をデザインした。その後別のエクササイズでは、子どもたちに各自の想像力を使い、コミュニティにおける平和と共存についてのイメージを絵に表現してもらった。子どもたちは、オリーブの枝と緑豊かな公園の絵を描いた。

-第 14 セッション (2010 年 3 月 20 日) : ナウローズ祭 (新年の祝い) の銅の絵。銅の板にトーチ (たいまつ、灯り) をイメージする絵を描いた。トーチは、民族やコミュニティに対する不正義に打ち勝ったことを象徴する。ファシリテーターは、3 月 21 日に行われるナウローズというお祭りについて説明した。最後に子どもたちは、このクルドのお祭りを祝うために、全員で踊った。

-第 15 セッション (2010 年 3 月 26 日) : リサイクルと環境。ファシリテーターは、環境を清潔で美しく保つための環境保護やゴミの捨て方について紹介し、段ボールや紙、衣類は、リサイクルすることによって新たな目的に使うことができることを説明した。また、ジュースの箱 (cans) をきれいにし、切って紙で覆うことによって、ペンケースを作るデモンストレーションを行った。子どもたちは、段ボールを使いチョウチョウを作り、卵のケースでその他いろいろな動物を作った。

-第 16 セッション (2010 年 3 月 27 日) : 最終セッションは、保護者も招き、お祝いの会とした。ファシリテーターは、子どもたちが 8 週間をかけて作ったアートの数々を紹介し、平和や共存に関して学んだ概念を再び振り返った。最後に子どもたちは、ワークショップへの参加賞として学校用のバッグと絵の具セットをもらった。

セッションを訪れたコミュニティの様々なメンバー：

- 地域委員会のメンバー
- 政党の党员など、コミュニティの代表者
- 学校の代表者や教員
- 参加者である子どもたちの保護者
- ボランティア
- ジャーナリスト

IV. 影響・成果

- 40人の子どもたちは、4つの異なる学校の別々のクラスから選ばれたため、アートセッションを始めるまで、お互いに知らなかった。アートアクティビティを通して子どもたちが、それまで知らなかった子どもたちと新たなつながりと友情を築くことができたのは、非常に明確である。さらに子どもたちは、(民族的・宗教的に)互いに異なる背景を持っていたが、最終的には壁を自ら越え、違う出身の子どもと友達になっていた。アクティビティ監修者によれば、プログラムの初めのうち子どもたちは、往々にして自分と同じコミュニティから来ている言語や背景が同じ子どもとばかり過ごしていた。しかし、ファシリテーターは、子どもたちの間で多様なつながりができるよう、今まで隣に座ったことのないクラスメートと座ることの重要性をセッション毎に訴えかけた。すると、あっという間につながりができていき、子どもたちはお互いの文化や背景について学ぶのを楽しんでいた。あるクルド系コミュニティ出身の女の子もその一人で、常にトルクメン系の友達の隣に座り、新しい言語の新しい言葉を学びたがっていた。
- アートセッションは、子どもたちに平和や寛容、人と人との違いについて学び重んじること、他民族の文化や言語、習慣を楽しむことなど、新しい概念を紹介することができた。子どもたちは、人と人との違いを大事にし、そこから学ぶことについて理解を深めた。セッションの前半では、子どもたちは他民族の子どもに近よりにくそうだったが、エクササイズを通してお互いについて学んでいくと共に隔たりが消え、関係が築かれて、友情が生まれた。
- セッションには、子どもたちの他に、地域委員会のメンバーやコミュニティの有力者、学校の教員、校長先生、保護者、ボランティアといった、様々なコミュニティメンバーの参加がみられた。皆、新たな世代にこのような概念が伝えられたことに感謝し、子どもたちにこのような概念をしっかりと教える中で、彼らも自らセッションへ足を運ぶことの重要性を深く理解した。教員である女性の一人は、自分のクラスでも同じようなアクティビティを導入したいと、アクティビティの監修者に伝えた。
- アートアクティビティは、学校以外に楽しんだり学んだりする場が少ない子どもたちにとって、大事な課外活動となった。これらのアクティビティに参加できることを大いに喜んでいた(とりわけ学校が休みになる2月の間)。ラパリンでは学校以外にアクティビ

ティがないため、アートセッションは子どもたちにとって大きな楽しみにもなった。現在のイラクの学校教育では芸術の位置づけが非常に低いため、校長先生や学校の先生方は、アートとお絵描きを特に高く評価していた。イラクは伝統的に芸術的な国であり、幼少期から子どもたちに芸術を創造し披露するスキルを磨く機会を与えるべきだと、彼らは強調した。

- ボランティア 15 人が参加し、セッション中の子どもたちの世話と運営を手伝い、インサーンをサポートした。インサーンにとって、ボランティアたちがアートセッションに参加し、子どもたちを楽しませたいという高い志、献身的姿勢があることを知るすばらしい機会となった。コミュニティ内で、ボランティア活動に対する肯定的な考え方が生まれたと思われる。

V. 困難と障害

- 治安情勢の影響により関係者間の信頼関係が希薄であったため、校長先生たちはアクティビティに参加する子どもたちの両親から許可を得よう求めた。中には、子どもたちの安全を心配して自宅から遠いところでのアクティビティへの参加を渋る家庭もあった。初めは、子どもたちの安全を確認するために保護者が付き添う姿も見られたが、2回目、3回目のセッションになると彼らはインサーンを信頼して、子どもをアクティビティに安心して参加させるようになった。
- 2010年2月に、ラパリン地区のインサーン・センターの近くで爆撃があり、子どもたちの安全を確保するために数日間アートセッションを延期した。

VI. 今後に向けて

- アートアクティビティのような子どもたちのための課外活動は、学校の休暇中に実施するのがよい。学校が休みの間に、子どもたちに非常に必要とされている娯楽を提供できるし、また、子どもたちの皆勤率が上がるからである。
- このセッションの枠の中で屋外での活動を取り入れ、保護者にも参加してもらうことができれば、子どもたちおよびその家族が関係性を作る上で非常に有意義であろう。遠足を計画することができれば、子どもたちが作った凧を揚げることもできる。
- 参加者の子どもたちの視点からアクティビティの影響を見るために、個々の参加者のヒューマンストーリーを集めたい。

以上